

令和元年度 白石町立白石小学校 学校評価結果

1 学校教育目標 一人ひとりの心と体やかなで、いきいきと学ぶ子どもの育成— *目指す児童像 ・めあてをもって勉強する。・自分の考えを持ち、進んで発表する。 ・自分や他者を大切にし、分け隔てなく接する。 ・気持ちのこもったあいさつをする。・外で元気いっぱい遊ぶ。 ・健康や安全に気をつけ、自分の命を守る。 *目指す学校像:子どもの確かな学びを支える学習環境を備えた学校 *目指す教職員:児童・保護者・地域から信頼される教師	2 本年度の重点目標 *教育活動の「質を高める」取り組み 1 確かな学力を育む教育活動の推進 2 時代のニーズに対応した教育の推進 3 豊かな心を育む教育活動の推進 4 学校、家庭、地域が協働した取組の推進(コミュニティスクール) 5 健康で安心、安全な学校・家庭生活の推進 6 学校における業務改善の取組の推進
---	--

達成度 A: ほぼ達成できた
 B: 概ね達成できた
 C: やや不十分である
 D: 不十分である

3 目標・評価

① 学校、家庭、地域の連携を深め、業務改善を推進する。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○学校経営方針	教育目標、本年度重点目標の周知	・教育目標を、保護者90%以上、外部80%以上が周知できる。 ・コミュニティスクールの共通実践目標「あいさつ」「家庭学習」「手伝い」「自力学校」の達成率95%以上をめざす。 ・教職員の学校運営参画意識を高める。	・学校便り、HP、校内掲示などを通して周知を行うほか、各種学校行事等の挨拶の中にも組み入れて周知の方法を工夫する。また、コミュニティスクールの機能を活用し、周知に努める。 ・教育目標と整合した学級経営や分掌事務などを意識させる。また、「佐賀県教職員人事評価制度」ともリンクさせ、夏期休業中に、中間評価を行い、教育目標との整合性を高めるPDCAを行い、学校運営の活性化を図る。	B	・教育目標、本年度重点目標の周知のために、学校便り、HPなどや各種学校行事等の挨拶の中にも組み入れて周知を図った。 ・コミュニティスクールを活用した活動(子ども見守り隊など)を少しずつ促進し、地域と共に教育目標の達成を目指す。 ・教職員一人一人が学校目標達成に向けて、子どもを軸にした教育活動を行った。	・コミュニティスクールを活用した活動を充実させ、地域や保護者への理解を図る。 ・学級経営や分掌事務については、中間評価によって振り返りを行い、見直しを図る。
運営	○教職員の資質向上	校内研究(算数指導)の充実	・児童一人一人が自分なりの考えを持ち表現できる授業づくりについて研究する。	・全員が授業を公開し、事前事後研修会を通してわかる授業づくりについて検討する。 ・講師招聘など指導法を学ぶ研修会を実施する。	B	・低学年においては、9割を超える児童が自分の考えを書いたり話したり、友だちとまじりながら返答している。高学年では他学年に比べ自己評価が厳しくなっているが、それでも8割は超えている。表現を意欲した授業作りの成果が出ていると考えられる。 ・保護者においては、全学年9割以上が、先生は子どもにわかりやすい授業をしていると回答している。ICT機器を用いた授業作りの成果を保護者も実感していると考えられる。 ・本年度の研究では、昨年度までの校内研究を基盤として導入の工夫や表現活動の充実、ノート指導に絞って研究を進めることができた。特に、ノート指導を全学級で統一して取り組んで児童の学習意欲や表現力を高めることができ、成果の一つとなった。今後は、校内研究の全体会のみならず研究会のあり方についても、職員の共通理解を回り実践につながるよう考えていきたい。	・児童の課題意識を高めたり表現し合う場面を工夫したりするなど、児童の「資質・能力」を高める授業作りを意識して実践を行っている。 ・講師招聘の研修会を含め、全体会のみならず研究会のあり方について実践的な研究につながるよう計画し、教師間の学級作り・授業作りについての情報交換や研究も生かせる校内研究に取り組んでいく。
教育活動	●志を高める教育	自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進	・自らの夢や目標の実現に向けて、努力する気持ちがあると答える児童80%以上をめざす。 ・「佐賀に愛を持って」と回答する児童80%以上をめざす。	・教科の授業や学校行事を通して、夢や目標について自ら考えさせる時間や場面を設ける。 ・地域の郷土学習資料や県教委作成の資料等を活用した授業に取り組む。	A	・「将来の夢や目標に向かってがんばっていますか。」の質問に「とてもがんばっている」「がんばっている」と回答した児童が80%を上回った。道徳の授業や学級活動において、夢や目標について考えさせる時間や場面を設けたからだと考えられる。 ・「白石町のよいところを教えてください。(下学年)」「佐賀県のよいところを教えてください。(上学年)」の質問に、「よく知っている」「だいたい知っている」と回答した児童は、下学年で80%を上回り、上学年では90%を超えた。総合的な学習などで、ゲスト・ティーチャーを招いたり、校外学習を計画的に実施したりした成果であると考えられる。 ・保護者アンケートの「子どもは、夢や目標を持っている」の質問にも「あてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した保護者の割合が、80%を下回った。 ・教職員アンケートの「授業や学校行事を通して、夢や目標について考える時間や場面を設定した」の質問に、「達成できている」「ほぼ達成できている」と回答した教職員の合計は90%を上回った。 ・教職員アンケートの「地域の郷土学習資料や県教委作成の資料等を活用した授業に取り組んだ」の質問に、「達成できている」「ほぼ達成できている」と回答した教職員の合計は70%だった。	・授業や学校行事を通して、夢や目標について考えさせる時間や場面を設けていることを学級通信などで保護者に伝える。 ・授業参観等で、夢や目標について考えさせる資料を扱った道徳や学級活動の授業に取り組む。 ・地域の郷土学習資料や県教委作成の資料等を整理・分類し、対象学年の教育計画にできるだけ入れていく。
教育活動	○低学年の学習環境改善	基礎学力の定着を図るための学習習慣・生活習慣の育成	・学習習慣・生活習慣の指導を繰り返して、80%以上の児童が定着できるようにする。	・「低学年の指導計画書」に基づいて形成的な評価を行い、補充指導及び個別指導を細やかに行う。 ・家庭学習の習慣化と明日の学習準備の定着化・生活習慣の定着を図るため、学級懇話会や学級通信、お便りなどを通して、保護者へ協力を呼びかけ改善を図る。「(すこやか)はなまるチェック」などの実施と活用)	B	・家庭訪問の際に家庭学習の手引きの配布や、懇話会・学級より等で学習習慣・生活習慣の定着を呼びかけたことにより、児童の意識調査では90%以上は達成することができた。「はなまるすこやか」はなまるすこやかチェックを生かして、自分自身の生活についてふりかえる機会を設けたことで、生活習慣の意識化を図ることができた。しかし、個人差も大きく、なかなか全体の意識が向上したとはいえない。	・家庭学習のやり方については具体的に指導する必要があるため、児童だけでなく、保護者へも、家庭学習のやり方(環境・時間)について、より具体的に話すことが大切であると考える。 ・はなまるすこやかチェックは、ほとんどの児童が習慣化できているが、個別に声掛けをしたり、お便り等で結果を知らせたりするなど、保護者への周知・徹底を図ってきたい。
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	校務等の効率化の促進	・各分掌間の連携及び情報共有を図り、効率的な業務への取組を推進するとともに、教職員の時間外勤務について1か月当たり前年度比10%削減する。	・定時退勤日(金曜日)を呼びかけ、実施を徹底する。 ・町内一斉定時退勤日(第1金曜・第3水曜)を徹底する。 ・業務を見直し、業務の改善・削減を図る。 ・業務改善に関する情報を発信したり、研修会を実施したりする。	B	・4月～2月の11ヶ月で、教職員の時間外勤務の平均時間を前年度と比べると、10ヶ月間が削減されており、前年度比10%削減することができている。一人一人の意識が高まっていると思われる。しかし、業務そのものの削減には至っていないので、校務分掌等の見直しが必要である。	・期の登校児童については廃止する。 ・校務分掌をもとに、業務の見直しを図り、思い切った業務の改善・削減をする。 ・定時退勤日の徹底を図る。

② 確かな学力の定着を図り、ICT機器等を活用した授業改善に取り組む。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	言語活動の充実	・授業において、児童の発表や話し合いなどの言語活動を意識した活動を盛り込み、表現力の育成を図る。	・話し方、聴き方のきまりを徹底し、様々な場面において児童が互いに表現し合える場の設定を意図的に行う。 ・校内研究を通して「言語活動・表現する力」について研修を深め、算数科の授業づくりやICT活用での言語活動の手立てを探り、授業の中に盛り込んでいる。	A	・算数の授業を中心に様々な学習で、ペアや小グループ、様々な形態を工夫した考えの交流の場を仕組んだ上で全体の交流・語り合いが行われたことで、すべての児童に学び合う時間が確保できた。また、低学年から、理由や根拠と合わせて自分の考えを伝えることができるようになってきた。特に上学年では少人数での考えの交流の場で相談や教え合い、話し合いなどが自然に行われ、更に深く、広く考えようとする知的好奇心や思考力が高まっている姿が見られた。 ・ICT機器の利活用により児童の問題場面を視覚的に把握させたりイメージさせたりすることで、学級の児童の態度に応じた導入が工夫され、児童が主体的に取り組もうとする課題設定につながった。 ・各学級の「算数コーナー」の設置により、「ノート名人」「ふり返り名人」紹介・掲示することで算数の学習に関し、児童はいつでもノートやふり返りの良い例を見ることができ、学習に生かす児童が増えた。 ・上学年では考えを表現し合う「対話的な学び」の姿が見られたが、下学年から出来るようにしていくことが大切。	・話し方、聞き方のきまりを提示し、いつでも活用できるように徹底する。 ・各年度での取組内容を継続することで、さらに言語活動を意識した活動や表現力を深化させる。
		少人数・TTなど指導方法改善の工夫	・学習内容の確実な定着を図り、単元別のテストで全国平均(期待値)を上回るようにする。 ・算数に関して、全学年複数の指導体制で行う。	・各学年で効果的にTTや少人数指導などの授業を実施するために、単元や領域に応じた年間計画を立案し実践する。 ・毎週、学級担任にTTの学習計画表を配布し、見直しを持った準備と教材研究に生かせるようにする。 ・根拠を明確にして説明できるように言語活動の充実を図る。 ・ノート指導を丁寧に実施し、自主的な学習につながるようにする。	A	・算数科の授業において、6年生は週5時間の全時間、1年生から5年生までは、週4時間ずつ、TTや少人数指導を実施することができた。その結果、市販テストの単元別内容の確実な定着を図ることができた。 ・佐賀県の学習状況調査(算数)では、6年生の「考え方」において県平均を下回る結果となった。表現力を高めるための手立てが必要である。 ・算数に関する意識調査では、「問題をいっしょにうめい」という96%(6月)から98%(1月)へと増加している。学習に向かう意欲が高まっており、わかりやすい授業になるように全職員で取り組んだ成果といえる。	・単元内容や学級の実態を考慮して、TTや少人数授業な授業形態の工夫をする。 ・個別の指導の時間の確保をする。 ・ノート指導や学習規律など、全職員の共通理解のもと指導の徹底を図っていく。 ・担任と綿密な打ち合わせをする時間を確保し、授業の進め方や支援の必要な児童への指導の方法について話し合うことが必要である。

		学習意欲の向上と基礎的・基本的学力の定着	各種学力テストで全国平均、県平均を上回るようにする。 算数について講師を招いての校内講習を実施し、指導法についての研究を深める。 種々な学力の定着を図るために、アンケートやテスト結果の分析を参考に、児童の学習を把握し実践に生かす。 チャレンジタイムの内容(音読、計算)や方法を工夫し、複数の職員で指導にあたり充実を図る。	A	算数の研究授業を計画的に実施し、講師を招いて有意義な校内研修を行うことができた。 算数の校内研究に取り組み、12月の学習状況調査では4年生、5年生は、全領域県平均を上回った。また、他教科においても全科目全領域県平均を上回る結果だった。6年生は社会は県平均を上回ったが、その他の教科は下回ったため、補充指導が必要である。 授業のはじめと終わりの挨拶やふりかえり活動、学習過程などの内容について、全職員で共通理解して全校で取り組み定着してきた。 多読書については、全国平均並みの結果であった。 チャレンジタイムの時間は、1クラスに教職員を2名ずつ配置し、指導・内容の充実を図った。 学年に応じたノート指導や発表形態の工夫をし、表現力の育成を図った。	算数科の研究を中心に、学習用具や機器(ICT等)の効果的な活用を行い、具体的な指導法(授業)の工夫、改善を行う。 引き続き、定期的に教職員において授業参観、授業研究会を行い、相互に指導について話す機会を設ける。 個別指導の時間を確保し、ボトムアップを行う。
教育活動	○教育の質の向上に向けたICT活用教育の実施	ICT機器を活用した授業の改善	ICT機器を活用した研究授業を、年に一人1回以上行う。 情報リテラシー、情報モラルに関する外部講師を招聘した校内研修を行う。 効果的であったICT活用事例について情報交換し、データの共有化を図る。 授業の中で、児童がICT機器を用いた表現活動の場を設ける。	B	多くのクラスで授業公開し、効果的なICT機器の活用を促した指導実践を行う事ができ、教師のリテラシー向上につながった。 外部講師を招聘し、来年度からのプログラミング教育について全職員で研修を行うことができた。 算数以外の教科での効果的な活用についても情報交換し、全教育課程での有効な場面を共通理解する必要がある。 算数や理科の高学年のプログラミング学習に繋がるための、下学年での取り組みやアンパブドによる学習の積み重ねが必要である。 情報モラルについては、常にアンテナを張り、現時点での問題点や課題を把握する必要がある。	校内研究の柱に、授業課程や場面に応じた電子黒板やタブレット/パソコンの活用を入れるなど、無理のない校内研修を重視する。 外部講師を招聘した校内研修を実施し、職員みんまでの共通理解を図る。 外部の研修まで学んだことは、校内に広げる時間を設ける。
教育活動	○読書活動	豊かな読書活動の推進	年間読書100冊に到達する児童を75%以上に上げる。 家読(うちどく)を奨励する。	B	年間読書100冊に到達した児童が、全体の85%以上になった。 昨年度からの継続で、毎日2冊貸し出しを行い、朝の時間(図書室)に毎日通う習慣が身についた子どもも、読書量も増えた。 読書週間や各学期のイベントを行うことで、普段図書室にあまり来ない子どもも本を借りる機会にすることができた。 各学期に、「おすめの本」をボックスに入れて1年間読書量、児童が良書を読む機会を確保できた。 読書マスターを認めて本を借りる児童も増えて、読書量が少ない児童もいて、読書量の個人差は大きいといえる。	多読書や読書マスターの紹介・表彰、「規定の冊数ごとに花を映かせる掲示」を継続し、児童の読書意欲を高める。 家庭での読書量を増やすために、毎日図書バッグを返すことを低学年で習慣化させる。 高学年の読書量が少ないため、借りる方法について担任と検討する。 読書を推奨するため、週末や連休前は図書バッグを持ち帰らず呼びかける。

③豊かな心を育む教育活動を推進し、特別支援教育及び教育相談の充実にあつめる。

領域	評価項目	評価の観点(具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	「道徳」授業の充実	地域、家庭との連携を図り、児童の生活に根差した道徳の授業を推進する。 児童の実態にあった資料を精選し、効果的な提示の仕方(ICT機器の利用、場面絵、写真、効果音など)を工夫して実践意欲を高める。	全クラス、授業参観において授業を公開する。(ふれあい道徳の実施) 授業後、感想や付箋などを書かせ、学級や家庭での話題にできるようにする。 授業の内容を学級便りなどで前もって伝えておくようにする。	A	「ふれあい道徳」と位置付けて授業参観の日に全クラス授業公開ができた。 道徳の教科書に準じた学習計画を作成し、週に1時間きちんと授業時間の確保ができてきた。 日常生活と結びつけて指導することができた。 今後も友達間の言葉遣いや接し方など、日常的に観察したり、QUTテスト結果を分析したりして、注意深く指導していく必要がある。	毎時間のワークシート等をノートにフォア的にとりかたけ、指導や評価に生かす。 わたしたちの道徳などの紙面を電子黒板に取り込み、朝の会や帰りの会の際にも、提示するなどして、日常的に活用する。
教育活動	●いじめの問題への対応	人権・同和教育の推進と充実	安心感・自己肯定感を高めるために「自分が必要とされている」という実感を持たせる学級経営を推進する。 いじめの未然防止と早期発見に努める。	学級経営案に沿って、学期毎にPDCAを行う。 学年の発達段階に即して、情報モラルを高める授業を行う。 構造的グループエンカウンター授業を計画的に実施する。 児童へのアンケート(心のカード)を月末毎に実施し、いじめの未然防止・早期発見に努める。	A	人権・同和に関する日々の取り組み、人権集会や人権週間の取り組み、レポートの作成、取り組みの交流などを週1回、支持団体の学級づくりを行うことができた。 毎月心のアンケートをとり、子どもの気持ちをつかみ、いじめなどの問題に先回り対応するよう努めた。 児童へのアンケート(心のカード)を月末毎に実施し、いじめの未然防止・早期発見に努める。	学年の発達段階に応じて、情報モラルを高める授業を行う。 特別支援については、保護者に早期に連絡を取り、家庭と連携して改善を図るようになる。
教育活動	○特別支援教育	個に応じた支援の実践	児童・保護者の「困り感」を考慮した支援の手立てを実践する。	支援が必要な児童に対して実態を把握し、個別の支援計画の作成や日常的児童の様子を記録を積み上げる。 必要に応じて校内支援委員会を開催する。 特別支援学級との交流活動や特別支援学級の公開授業に積極的に参加する。 巡回相談を活用し、児童のよりよい支援の方法を探る。	B	児童の実態に応じた学習支援の工夫が90%以上であった。「ほぼできていない」と答えた職員が30%以上であった。 児童・保護者アンケートについても、「できていない」「ほぼできていない」と答えてきた項目で90%を超えており、学校での指導は結果を出せていると評価できる。 一方、特別支援学級との交流については、「できていない」「ほぼできていない」と合わせても、58%にとまどっており、この課題である。 支援相談委員会は、児童の様子を全職員で共通理解するとともに、支援が必要な児童に対して対応するために役立った。	今後も、ケース会議の開催など、困り感を抱える児童への対応を多くの目で捉え、全体で対応できる場をつつていく。 行事の見直し、精選、内容の簡略化、計画的な授業計画などを進めて、子どもと向き合えるような時間の余裕・心の余裕の確保を行う。 特別支援学級との交流や、支援を要する児童に対する理解を深める活動について、機会を増やしていく必要がある。
教育活動	○教育相談	教育相談の充実	情報の共有と指導・支援の共通化を図る。 SC、SW、開関係間を効果的に活用し、職員の間で児童の悩みに応じた指導や支援を推進する。	支援相談委員会を確実に実施し、気になる子の情報共有を図り、全職員で共通した指導に当たる。 地域、保護者対象の講演会を効果的に実施する。 月1回のほっとタイムでの各学級の効果的な取り組みを継続して紹介、活用する。 教育相談週間(先生あのお週間)を実施し児童の不安感を減らす。	A	児童は、色々なことを先生とあまり話さない話さない子が15%ほどいた。話す・話せる機会を増やしていく必要がある。また、ほっとタイムの時間は、高学年以上の子に任せ、感じる子が増え、担任の工夫が伺えた。 保護者は学校へ相談できるが90%弱であった。1割程度の保護者は相談しにくいと感じられていた。 教職員は多様な多感やメンタルヘルスについて継続した研修、50の面談等を取り組む。	児童と教職員が話しやすい機会(先生あのお週間)の工夫が必要である。 保護者が学校への相談がもつと身近に感じられるような存在を知らせる手立てを工夫する。 教職員が多様な多感やメンタルヘルスについて継続した研修、50の面談等を取り組む。

④健康で安全な学校・家庭生活を推進する。

領域	評価項目	評価の観点(具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○安全教育	危機対応力の育成	年間3回(シュート2回・ロング1回)の避難訓練を計画し、自然災害や火災、不審者侵入に対応できるように訓練を行う。	事件や災害に対応できるように、発生場所・発生時刻などを工夫し、より効果的な訓練を計画する。 関係機関から提供されている資料(DVD等)を各クラスで指導する時間を確保し、学校内外における危機対応力を高める。 不審者はどこか入ってきたても対応できる意識が必要である。体育館を避難場所とするため、常時開設しておくを取り決めている。 危機管理マニュアルの読み合わせ、改訂など定期的に実施する必要がある。	A	火災や大雨を想定した訓練と地震対策、不審者対策訓練を実施。避難経路の確認、避難時の心構えの確認ができた。高学年のほうは、避難方法が分かっている割合が高いため、繰り返し実施することで、定着していることが分かった。 地震対策では、アラートの音で地震を告知した避難指示の放送を出すことを試みた。今後、地震時の津波(洪水)、建物の倒壊などいろいろな場面に合わせた避難の仕方を検討する必要がある。 不審者はどこか入ってきたても対応できる意識が必要である。体育館を避難場所とするため、常時開設しておくを取り決めている。 危機管理マニュアルの読み合わせ、改訂など定期的に実施する必要がある。	朝の時間、休み時間、特別教室での授業など、いろいろな場面で災害を想定して、訓練することも必要。児童には知らせず、引き続き実施することで、より実践的で緊張感を持った訓練ができる。 津波や原発事故を想定した避難訓練の実施の必要も検討する。 投機や消防署などの関係機関との連携で、よりよい訓練のあり方を考える必要もある。 緊急メールを活用して、保護者と連携した水害時の避難行動の確認を実施することも検討する。
教育活動	●健康・体づくり	日常生活の充実	基本的な生活習慣(早寝、早起、挨拶、立腹、清掃、食育等)の定着を図る。 90%以上の児童が実行できる。 日常的に立腹の姿勢を保てるようにする。 毎日、バランスの良い朝食を摂れるように啓発する。	はなまなごやチェック(生活習慣チェック表)を学級指導に生かし、保護者への啓発に努める。 立腹の姿勢が保てるよう、いろいろな場で意識させていく。学校での取り組みを家庭へも紹介し、定着を図る。 朝食をバランス良く摂れるよう、栄養教育による食育の実践し、家庭への普及に努める。	B	児童は、生活習慣(立腹)はなまななごやチェック(給食のマナー等)については、90%近の子が守れているという高い意識を持っていて、保護者にとっては、家庭でできる生活習慣の学びが活かされていないとの判断で、70%程度の項目もあった。 教職員も、今できる指導はやっていくという意識が高い。	学校での取り組みを家庭へつなぐ、実生活での行動変容になるようなPTAとの協力体制を考へていく。 食育については給食週間を利用し、食育授業(食物アレルギーについて等)を全校一斉に行う等工夫していく。
教育活動	●健康・体づくり	運動習慣改善と体力づくり	児童の80%以上が週に3日以上外で遊ぶように啓発を行う。	クラスでみんなで遊ぶ日を設定するように、健康委員会と呼びかける。 委員会活動の中で児童が計画したゲームや集団遊びを行った。学期ごとに集団遊びを実施したりすることで、外で積極的に遊ぶ児童を増やす。	A	11月に取り組んだ持久走週間では、積極的に走っている児童が多く、また、1月には進んで継続的に取り組む、楽しいことに参加する児童も増えた。 11月に取り組んだ持久走週間では、積極的に走っている児童が多く、また、1月には進んで継続的に取り組む、楽しいことに参加する児童も増えた。 11月に取り組んだ持久走週間では、積極的に走っている児童が多く、また、1月には進んで継続的に取り組む、楽しいことに参加する児童も増えた。	道具などを増やし、より積極的に外で遊ぶ児童が増えるようにしていきたい。 縦割り班を活用したり、委員会や児童会企画の大会を増やすよう促して提供していきたい。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

算数科の校内研究に取り組み、学習方向に関しては、目標を達成することができた。校内研究において、全職員で取り組む方策等について話し合い、実践した成果と考える。来年度は、今年度実践したことを深めていくことで、さらなる成果を上げたいと考える。
スクールカウンセラーとQ-Uテストの活用など、積極的に教育相談活動に取り組んだ。来年度は特別支援学級が1学級増設され、通級指導教室へ通級する児童も増える。通常学級において支援を必要とする児童もいることから、職員が支援の方法を研修したり、児童が互いに理解する場を設けたりするようにしていきたい。
業務改善については、依然として課題が多い。校務分掌の見直しや、職員の意識改革にさらに取り組む必要がある。

●は共通評価項目、○は独自評価項目